

博士論文要旨（平成26年度）

平成26年度に提出された博士論文は、論文提出によるもの1編である。
論文の要旨を次に掲載する。

《論文博士要旨》

中世都市奈良の考古学的研究

佐 藤 亜 聖*

本研究の目的は、日本を代表する中世都市である奈良について、考古学的方法を用いて分析することで、日本中世の宗教都市の在り方を検討することにある。また、従来断片的な情報を過大評価する傾向があった考古学的中世都市研究に対し、考古資料を軸に俯瞰的視点から検討を行うことで、新しい視座を供することも目的とする。

第Ⅰ部では古代都市平城京の衰退から中世都市奈良成立の過程を考察した。

近世に遡って研究史を整理すると、中世都市奈良の研究は、その宗教都市としての性格上、寺院史的観点からの研究が多く、また基礎史料も『大乘院寺社雑事記』や『多聞院日記』など中世後期の史料に偏重しており、景観復元的研究や中世前期の都市形成を扱った研究は僅少であった。その最大の原因は、発掘資料を丁寧に集成し、都市を俯瞰的に捉える考古学的研究の欠如にあると考える。そこで、本研究では基礎資料として、外京域を除く平城京域における長岡京遷都以降の遺構検出地点619カ所、外京域におけるすべての発掘調査地点486カ所、計1105カ所のデータを集成した。その上で、まず研究の基礎となる編年軸を整備すべく、土師器皿の編年を試みた。

こうした準備的研究を経て、古代都市から中世都市への変貌を検討した。中世都市奈良の前提となる平城京外京は、台地上、傾斜地、扇状地・谷底低地の3地形帯に規制された条件下にある。更に、条坊道路は一部不明ながら3地形帯全体をカバーして面的に敷設されており、その規格はほぼ1坊1500大尺を基準とした東四坊大路以西の通常京内と同じである。坪内の宅地利用が限定的で、坪単位で利用状況が異なるといった差異はあるが、平城京外京域は原則として通常京内と同様の空間であったと考えられる。外京域が通常京内と同じであるとすると、その廃絶過程もまた通常京内の廃絶と同様であったと考えることができる。

古代都市平城京は長岡京遷都によって廃絶するが、その後も遺構が見られる。都市奈良へと転換する最初の画期は、旧平城京域の遺構分布が外京域へ集中し始める10世紀前半に相当する。この時期、遷都後も残された多くの諸施設が廃絶し、さらに飛鳥諸宮や藤原宮も廃絶する。これは廃都後の平城京が9世紀後半頃までは古代王家家産として扱われていたことに起因する現象で、その管理体制が解除された結果、旧都城域の農村化と、寺社門前域の都市化という「自然なベクトル」が顕現化したものと考えられる。この時期を都市への萌芽期と位置付けられるが、この画期はそのまま中世都市成立に結び付かない。

都市の成立は11世紀後半に位置づけられる。この時期は奈良の基本領域となる台地上の地域に遺構が集中し、中世諸郷の後裔とも呼べる現在の町の境界が形成され、中世都市としての基本条件が整う。奈良における都市形成については、従来治承4年の南都焼打に伴う都市景観の壊滅が平成26年度 *公益財団法人元興寺文化財研究所 主任研究員

前提として考えられてきたが、都市の基本形態成立はそれを大きく遡ると言えよう。治承兵火の影響は寺社境内以外の場所では全く確認できず、積極的に評価できない。おそらく南都からの注進ほどの被害ではなく、その影響は兵火からの復興に伴う間接的都市整備にあったと考えられる。

第Ⅱ部では奈良という都市が有する多面性について検討した。

奈良では13世紀に入ると急速に都市内部の整備が始まる。最も特徴的なのは都市縁辺部における開発の活性化であり、都市奈良の領域がおおよそ定まる事である。さらにこの時期、北市・南市という奈良独自の市が成立する。これは木津から奈良への道路整備などと連動する出来事と考えられ、その背景には興福寺とその実務を担った律宗教団の存在が垣間見える。また、手工業のあり方を見ると、興福寺・東大寺門前域に加え元興寺北西部に鍛冶関連遺物や骨角の加工を行う場が確認できる。特に興福寺郷での手工業生産は顕著であり、官庁街的な東大寺郷と商工業地的な興福寺郷の差は歴然である。『大乘院寺社雑事記』に記載のある浄土寺（新浄土寺）はこうした手工業民と深く関わる寺院であった可能性がある。

こうした都市内部における手工業民は、13世紀後半以降大きく再編を受けたと考えられるが、それを如実に反映するのが『職人歌合』にも記載のある輪花形火鉢の成立過程である。輪花形火鉢は14世紀初頭頃に、土器工人と瓦工人の計画的融合の結果生み出された商品と考えられ、出現当初から京都方面への販売ルートを確保していた。『大乘院寺社雑事記』には火鉢作座が興福寺大乘院に属していたことが記載されており、こうした再編が興福寺主導で行われていたことが窺える。

次に葬送墓制から奈良を検討した。中世前期の奈良では都市内部に墓が見えず、かわりに念仏講のような地縁的葬送互助集団が確認できる。平安～鎌倉期における墓の存在は不明だが、その後中世後期には般若寺や眉間寺、百毫寺などでの葬送、造墓記録が見られ、元興寺極楽坊における納骨と造墓が明確になる。最大の画期は16世紀後半～17世紀初頭に都市周縁部に浄土系を中心とした新仏教系寺院が多数建立されるようになる事である。これらの寺院は境内に墓地を持ち、墓地内に地域単位の念仏講衆碑を設置する。これは元興寺旧境内の解体に体现される中世的都市規制の解体と連動するものであろう。

こうした奈良の墓地構造は、古代都市が私領化されて分断されてゆき、やがて都市内に共同体による墓地が発生する平安京とは異なり、むしろ、墳墓堂以外に墓はみられず、居住域外である北上川対岸の元町Ⅱ遺跡に集団墓地を営む平泉と共通する点が多い。これに対し博多は、成立初期から屋敷墓的な土葬土壙墓が多数営まれ、都市成熟に伴い13世紀には墓が周縁に追い出されるが、これは都市でないものから都市へと発展していった博多の性格を如実に表していると考えられる。こうした視点で鎌倉を見ると、鎌倉も奈良同様中世を通じて都市内に墓は見られないが、13世紀後半以降、やぐらや浜地の墓地が形成される。その原理は平泉型計画都市から発展して、都市を構成する都市民（武士階層）の都市への定着によって、都市周辺にイエ原理の葬送地が出現するという経緯を体现したものであった。このように一口に「都市」といっても、その様態には様々な形態・推移があることを示した。これは日本中世都市の類型化の困難さを示す一例と言えよう。

さて、こうした奈良の諸相を通じて浮かび上がる中世的な奈良の姿が、どのような過程を経て

近世「ならまち」へと変貌したのか、という点も本研究の重要なテーマである。近世の奈良は、『奈良曝』記載都市居住者の業種別居住地で見られるように、興福寺・東大寺近隣の寺社関係者と、旧奈良縁辺部の一般民という階層別居住状況が確認でき、中世以来の都市基本構造を維持していたと言える。これに対し、元興寺旧境内における景観変化は著しい。元興寺旧境内、特に僧房以南の主要伽藍域は16世紀後半頃まで空閑地として維持されており、その後急速に町家化してゆく。特に17世紀初頭には礎石の埋没処理と鍛冶関連職人の集住という大規模変化に曝される。これらは、織豊期～幕藩体制確立期に到る政治転換期における、興福寺六方衆を主体とした中世的都市規制の解体過程に連動するものと考えられる。

第Ⅲ部では中世都市奈良を外側から眺める視点で考察した。

第Ⅱ部において都市における葬送共同体が庶民化、細分化の方向を示すことを明らかにしたが、この状況は都市化の進展を示す都市独自の現象であるのか、農村部でも並行して見られる現象なのかという点を明らかにするために、農村部の墓制との比較を行った。奈良盆地南端にある高取町市尾墓地は奈良県を代表する惣墓であるが、ここでは13世紀代の散在する名主層の墓地が、14世紀になると越智氏を頂点とする武士団形成に伴って市尾墓地に収斂する。これはその後在地領主である越智氏の没落にともなう16世紀後半～17世紀前半までの空白期間を経て、一般民衆の惣墓としての市尾墓地へと続いていく。

以上の状況は村落とその構成住民の動向を反映した現象であるが、こうした村落と寺院、耕地開発の関係を大和盆地北部、西大寺周辺で検討してみた。西大寺は平安期以降、周辺農民を寺僧として取り込むことで農村寺院化したと考えられているが、発掘資料からは12世紀代には周辺開発が頭打ちになっていたことが窺える。この状況を打破するには技術革新と集約的農法の導入が必要であったが、13世紀後半には西大寺主導でこれが達成されたと考えられる。13世紀代の特徴は、寺院と寺辺住民への関わりが、直接的に景観へも影響を及ぼす点にある。このような寺院と寺辺所領の関係性は大和国内の中小規模寺院の動向にも看取できる。大和において古代からの系譜を引く寺院は、大半が10世紀には衰退する。12世紀末～13世紀初頭には復興の画期があるが、これは南都治承兵火からの復興の延長でとらえられそうである。最大の画期は13世紀後半で、この段階では都市部の庶民信仰を背景とした都市寺院化、農村部の集村化にともなう新興階層を取り込んだ村落寺院化、領主層の成長にともなう菩提寺化といった、地域社会の形成に連動した変化が見られる。

以上、本研究では主に以下の点を明らかにした。

①中世都市の成立について

10世紀前半の都市萌芽は中世都市成立へ繋がらず、都市の成立は11世紀後半にある。その背景には古代伽藍寺院から中世子院寺院へという大寺社の中世的転換があり、寺社にイエ原理が持ち込まれる事で京都と奈良が直接的に関連を持つようになった点に注意が必要である。また、これに伴う寺外宿坊の展開も都市化の要因である。

②都市の完成について

都市独自の装置と領域が完成する13世紀後半が画期である。その背景には治承兵火からの復興

に伴う新住民の成立とその都市民としての定着、新しい共同体の発生があった。

③中世都市から近世都市への転換について

中世都市から近世都市への変化は16世紀後半から17世紀初頭にかけて段階的に進む。主に統一権力による都市権力の解体が原因であるが、それを生み出した農村部における在郷武士団の解体も大きな要因である。

④宗教都市奈良の特徴

宗教施設である大寺を求心性の基盤とし、その変質が中世都市成立の契機となっている点が奈良の宗教都市としての特徴である。同時に近世都市への転換もまた中世寺院体制の崩壊を伴うものであった。都市奈良の歩みが大寺院の体制変化と連動している点に、宗教都市のあり方を見出せる。